

《書評》 島岡 茂『ロマンス語の話』

(大学書林/1970年) ￥1,000

本誌第2号(1968年)に紹介した原田氏の概論に続く、わが国2番目のロマンス語の概説書である。原田氏の書評にあたって、評者が「未刊ではあるが、ある語学専門の出版社から『ロマンス語の話』という小冊子が予定されているそうである」と書いたものがこれで、このように早くその刊行を見るに至ったのは、わが国のロマンス語学会のためにもまことに喜ばしいことである。著者は早稲田大学法学部教授、フランス語・スペイン語をはじめ多くのロマンス語に通ずる数少ない学者の一人で、もちろん本会の有力な会員でもある。

本書は次のような構成をなしている。1) 序論, 2) ロマンス語の音声, 3) ロマンス語の語彙, 4) ロマンス語の文法, 5) 英語とロマンス語, 6) ロマンス語学の歴史, 7) ロマンス語学習の手引き。168ページの小冊子にしてはやや高価だが、著者が狙いとしている「初心者のための手引き」(p. 1)としては、内容も充実しており、信頼のおける好著であると言えよう。「専門的意味における「概論」ではない」(p. 1)と著者は謙遜しておられるが、後述する二三の点を除けば、わが国ではまだ数少ない大学の専門課程の「ロマンス語概論」や「ロマンス語入門」のテキストとしても、啓蒙的な意味でのよいテキストになると思われる。以下、各章(?)について解説と評価を試みることにしよう。

1) 序論では、まず「ロマンス」という語の起源と各言語においてその語が持つ意味のニュアンスを手ぎわよく解説し、次にロマンス語の直接の祖語と言われる俗ラテン語の復元の諸問題に触れ、それからロマンス諸語が分化した要因を i) ローマ植民の時期のずれ, ii) ローマ各地の先住民族の言語「基層」(substratum)と侵入民族の言語「上層」(superstratum), という2つの要因から説明しようとしている。これら2つの要因については、著者も述べているように学者間の意見はかならずしも一致せず(W. von Wartburg, Die Entstehung der romanischen Völker, Tübingen (Niemeyer), 1951² や F. H. Jungemann, La teoría del sustrado y los dialectos hispano-romances y gascones, Madrid (Gredos), 1955などを参照されたい), そのまま鵜呑みにするのは危険であるが、本書の紙数ではこれ以上望むべくもない。

2) ロマンス語の音声では、数限りないロマンス語音韻史の問題の中から、i) 東西ロマニアの分化, ii) 南北フランスの分化, iii) ロマンス語にみられる特異の音韻, という3本の柱を選び、それらに関する音声変化の主なものを取り上げている。たとえば i) 東西ロマニアの分化に関しては、(1) 中間母音の消失, (2) 語尾子音 m, s, t の脱落, (3) 母音間の閉鎖音(c, p, t)の有声化, (4) 母音間の s の有声化, (5) 母音 e, i の前での c, g の口蓋化, というように、各現象について、俗ラテン語およびロマンス諸語の適切な事例の引用があり、その点でも説得力がある。しいて注文をつければ、原田氏の概論の書評でも言ったことだが、個々の音声変化だけでなく、音の対立関係の変化(つまり音素変化)についても少し言及してもらいたかった。その意味で、iii) ロマンス語にみられる特異の音韻のところで、Posner, Romance Languages, New York (Doubleday), 1966, pp. 105-125 が挙げているような特徴のいくつか(たとえばフランス語の円唇母音化, スペイン語の摩擦音素の特異な分布, など)を、少くとも独立項目として触れてもらいたかったと思うが、それも欲ばりすぎであろう。

3) 語彙の章はこの本の最も長い部分で、また最も分かりやすく一般受けする部分である。有名な「みつばち」(pp.38-39)や「ねこ」と「にわとり」(pp.43-45)をはじめ、約40に及ぶロマンス語の語群の歴史が手短かに述べられており、読んでいたいへん楽しい。そして注文をつければ、個々の語彙項目の歴史だけでなく、各ロマンス語の語彙体系全体としての変化に触れてもらいたかったことや、扱った語群の配列をたとえば意味の基準などでもう少し整理してもらいたかったことなどがある。誤植がいくつか目についた。多く「<m>」が失せて → 多くは「<m>」が失せて (p.31), 英語の, lie → 英語の lie, (p.46) など。

4) 文法の章は、前章に続いて長く、内容もかなり充実している。もちろん、第2章の音声の場合と同様、ロマンス語文法史の研究対象となる問題の数は限りがないので、その中からいくつかの代表的な問題を選んだ上でのことである。形態論的な i) 性 (genre) の単純化 ii) 格 (cas) の消滅 iii) 数 (nombre) の表現、統語論的な iv) 冠詞の発生 v) 人称代名詞の主語形 vi) 動詞の迂言語法、という6つのテーマを扱っているが、その中でとくに

i) の性と iv) の冠詞の歴史が、限られた長さの割にはたいへんよくまとまっているように思う。ただし、p.68の表の下で「西ロマニアで失われた中性形がなぜ東ロマニアで存続しているか…」とあるのは、ルーマニア語で中性と呼ばれる名詞類は、それ独自の屈折変化をするわけではなく、単数が男性形の変化で複数が女性形の変化をする、いわば混合性 (mixed gender) であることを考えれば、「存続して…」という表現は問題である。ほかに誤植の多いのが気になる。p.78の「<tauri corium…>」の tauri には下線が必要、p.84下から5行目の ipse ille medianus は ille にも下線が必要、p.94のタイトル 7) 動詞の迂言語法 は 6) の誤り、などが評者の目についた。さらに欲を言えば、p.92中段のフランス語の「いわゆる補語格という形」には、一般読者のことも配慮して、具体例 (moi, toi など) を示してほしかった。

5) この章は、以前のものとは違い、ロマンス語を英語と比較検討したもので、ある意味で第3章の語彙に負けず劣らず面白い。著者にとっては得意の分野であるらしく、短かい範囲にかなり多くの内容を盛りこんでいる。ラテン語やロマンス語 (とくにフランス語) から由来する語と、フランス語を模倣した熟語や成句の紹介から始まり、i) 名詞の複数語尾 -s, ii) 格消失と前置詞の使用、iii) you の単数化、iv) 進行形の発展、v) 未来の shall, will の普及、vii) 比較級 more… than の成立、などの問題が取り上げられている。英語教師でも多くの新知識を得て、有益なのではなかろうか。誤植のないのもよい。

6) この章では、主として19世紀以後の言語学史を背景とするロマンス語学研究的歴史が提示されている。著者の平素の研鑽がいかにこの分野全体に広くまたがり、また多くの著作を深く理解しておられるかが分かる。そして、日本の一般知識層にこの分野が不当に知られていないため、それを啓蒙しようとする著者の熱意が痛いほど感じられる。語彙の章につく多くのページ数がここに割かれていることでも、そのことは明らかであろう。ある意味では、全体との釣合いから少し多すぎはしないかという感じさえする。ほかに、誤植がかなり気になった。正しく認識されている → 正しく認識されている (p.120), すに B そのものの中にある → すでに B そのものの中にある (p.129), 言語地理 → 言語地理学 (p.129), ジリエロンの言語地理 → ジリエロンの言語地理学 (p.130 と p.145), 『音韻論原理』(1935) → 『音韻論の原理』(1939) など。また、学者の生死の年代やその著書の出版年代で疑問のものが、ほかにもいくつかあった。追加として、p.133の M. L. Wagner (1880～) は (1880～1963) であることを申しそえる。

最後のロマンス語学習の手引きは、前の原田氏の概論に比べてはるかに up-to-date で、行きとどいている。一つだけ気になったのは、イタリア語で矢崎源九郎『イタリア語の話』（大学書林）を挙げるなら、ルーマニア語でなぜ直野敦『ルーマニア語文法入門』（大学書林）を挙げなかったかということである。また、最近再版されて入手可能になったものとして、p.165のイタリア語の項に C. H. Grandgent, From Latin to Italian, New York, 1971²を追加したい。

以上総括して言えることは、体系的考察に欠けるうらみはあるが、日本語で書かれた最初の優れたロマンス語概説書として、本書の出版は記念すべきことであり、著者島岡氏の努力と熱意に心からの敬意と祝福を贈りたいということである。なお参考のため、本書についてはすでに気鋭のロマンス語学者大高順雄氏による書評（西洋中世文明ロマンス語研究所刊 Cahiers d'Etudes Médiévales VI (1971), pp.33-34)があることを、申しそえておきたい。

（東京教育大学助教授 田中 春美）

バック・ナンバーの価格について訂正

本誌の前号 p.52 で、バック・ナンバーの頒布価格について、その発行年に該当する会費（年間1,000円）と同額の料金を申し受けるように書きましたが、これは、1部につき実費として500円でお頒けすると改めます。バック・ナンバーの在庫はなお相当数ございますので、お知り合いの方にも購読をおすすめくださるようお願いいたします。

* 投稿・大会での研究発表をお待ちしております。（次回大会は4月22日・国学院大学の予定です。） 投稿規定の要旨は下記のとおりです。

＜投稿規定＞（抄）

1. 用語は、日本語、フランス語、スペイン語、イタリア語、英語、またはドイツ語。
2. 日本語のばあい、原稿は左よこがきとし、現代かなづかいにしたがい、漢字はなるべく当用漢字のわく内のものを用いる。
3. 外国の人名、地名、書名などの固有名詞は、国名や首都名は別として、原名でしるす。
4. 句読点は欧文式にしたがう。（例 . , ; : ）
5. 年号は西暦をつかう（元号を併記するときはカッコに入れて西暦のあとに加える）。世紀にはローマ数字をあてる。（例 XIX世紀）
6. 注は通し番号とし、まとめて原稿の末にそえる。
7. 原稿の分量は、論文のばあいは400字詰で40枚以内（欧文のばあいはタイプで500行以内）、書評のばあいは10枚以内、研究発表要旨は6枚以内。
8. 投稿原稿の採否は編集委員会の判断による。
9. 印刷上の体裁についても、編集委員会の意向による。（10.省略）
11. 稿料は支払わない。